



弥三郎婆

やさきぶろうばば

はじめに

新潟県西蒲原郡の弥彦山には、弥三郎婆という鬼婆の話が伝わっています。これには、幾つかの異説がありますが、たとえばウィキペディアには以下のような話が収録されています。

「弥彦山の麓に、弥三郎という男が老いた母親と共に暮らしていた。ある日、弥三郎は山の中でオオカミの群れに出くわしてしまい、大木に登って難を逃れようとした。

するとオオカミたちは梯子状に肩車を組んで男に近付いてきたが、あと少しのところまで高さが足りないう。一番上のオオカミが「弥三郎の婆を呼べ」と吠えだした。すると空に暗雲が立ち込め、その中から毛むくじやらの腕が現れて弥三郎を掴んだ。弥三郎は必死に刀でその上を斬りつけると、雲もオオカミも消えてしまった。



彌彦神社

弥三郎は、オオカミたちはなぜ自分の母を呼んだのだろうと不思議に思いつつ、斬り落とした腕を持って帰宅した。家では母が布団を被って妙な声で呻いていた。弥三郎が事情を話して件の腕を見せると、母は「これは俺の腕だ」と叫び、肩口から血を滴らせつつ逃げ去った。この母の正体は鬼婆であり、本物の母は既に鬼婆に食べられてしまった後だったという。」

千匹狼

これは、「千匹狼」とか「鍛冶屋の姥」と呼ばれる話で、全国的に広く分布しています。木の上に逃げた人間を、狼たちが肩車で追い詰めますが、あと一歩でとどきます。そこで狼たちは「鍛冶屋の姥」などと呼ばれる魔物を呼び出すのですが、逆襲の刃にかかって逃げ出します。その後、魔物の名前に覚えがある人間が、正体を突き止めて退治するというのが通常のパターンです。上述した弥彦の弥三郎婆の場合、もともと地元で語られていた話に、「千匹狼」が融合したと考えられます。今となっては、原型がどのような話かわかりませんが、その一端をうかがわせる弥彦の鬼婆の話は「弥彦観光協会」のHPからご紹介しましょう。

弥三郎婆

弥彦山の山麓には、越後国一宮

死す。その死体髪逆立ち、手を握りて爪肉の中へ延通す。顔色猶怒りて眼を開きてこれあり。」

元年(1156)、典海大僧正が山のふもとの大杉の根もとに横になっている弥三郎婆を見つけ、本来の善心に立ち返らせるべく説教すると、婆は自らの所業を悔い、「妙多羅天女」という神仏を守護する天女となり、彌彦神社近くの宝光院にまつられたといわれています。

弥三郎婆の原型

すでにこの話では、悪鬼と化した弥三郎婆が、弥三郎を襲って腕を斬り落とされるなど、「千匹狼」との融合のきざしが見られます。また、このさらに原型といふべき次のような話を、谷川健一氏の『鍛冶屋の母』が、「弥彦神社叢書」から紹介しています。

「明応の御造営成就して、大工鍛冶棟上げ異論に及び、一二を争ふて高橋にこれを訴へ、ついに菅番大工棟上げ、式番鍛冶棟上げ致すべしと裁断さる。この時鍛冶弥三郎と云ふものの母、悉く野心を含み、当小滝ヶ沢の奥に入りて喰事をせずして

この話では弥三郎の母が、無念のあまり憤死しますが、鬼婆になってはいません。谷川氏によると、寛永十一年(1634)に、妻戸神社の神職であった高橋太郎左衛門が写したものと記されているので、少なくとも江戸時代初期には、このような話が伝わっていたようです。

鍛冶が先か、大工が先か

鍛冶と大工の争いについては、上述の話のほかに鍛冶と大工のどちらが先かで言い争ったという話が弥彦周辺で伝わっていると、谷川氏は前掲書で報告しています。鍛冶の言い分では「カンナやノミがなくては大工は仕事ができまい」。大工は「フイゴを大工がこしらえなければ鍛冶ができまい」とお互い譲らないところから、天からフイゴが降ってきた鍛冶が勝ったという、これまで見てきた話とは逆の顛末になっています。まるで「卵が先か、鶏が先か」のようですが、このような話は世界中で見られることから、谷川氏は弥彦神社の上棟式の争いよりも古い話だと推測しています。

弥三郎婆の怒り

なるほど、そう考えると通常大工

の棟梁が仕切るはずの上棟式を、鍛冶と大工が争ったなどという話ができたことも理解できますし、鍛冶の弥三郎の母が、なぜ憤死しなければならなかったのかも、わかるようになります。そもそも、彌彦神社の神は鍛冶に関係すると谷川氏はいいます。そうだとすれば、弥彦周辺で鍛冶が大工に勝つ話が伝わっていたことも納得できます。そこから、上棟式を争う話が成立したと仮定します。しかし、普通は上棟式を執り行うのは大工ですから、勝利するのは当然大工となるでしょう。その時、晴れる彌彦神社に仕える鍛冶が、出し抜かれたらどうなるか。「弥彦神社叢書」の話が真実かどうかは別として、上棟式の順序争いに敗れたために、鍛冶の母が憤死したり、鬼と化さねばならなかった理由の遠因がここにあるかもしれません。

酒呑童子

また、酒呑童子との繋がりも見逃せません。『御伽草子』の「酒呑童子」では、酒呑童子本人が「それがしが古をかたりて聞かせ申すべし。本國は越後の者。やま寺そだちの稚児なりしが。・」と自らの出生をかたっています。この山寺とは、弥彦山と峰続きの国上山にある国上寺のことです。酒呑童子姿見の井戸などがあり

おわりに

実は、近江の伊吹山には、伊吹童子という魔物に関する伝承があり、『酒呑童子異聞』を著した佐竹昭広氏によると、伊吹童子が大江山に移り住んで暴虐榮華を誇ったことから、これは酒呑童子の前身と考えられますが、『続お伽草子』の「伊吹童子」には父親が「伊吹の弥三郎」だとあります。越後と近江の両地で弥三郎の名を冠する魔物の伝説があることは、決して偶然とは思えません。酒呑童子に関連して伝わった「伊吹の弥三郎」が、鍛冶の弥三郎と同名であったことから、弥三郎婆の伝説の誕生に一役買ったのではないのでしょうか。(文：江口知秀)

ます。また、燕市砂子塚には誕生之地があるなど、この近辺は酒呑童子と強く結びついています。

おわりに

それは、近江の伊吹山には、伊吹童子という魔物に関する伝承があり、『酒呑童子異聞』を著した佐竹昭広氏によると、伊吹童子が大江山に移り住んで暴虐榮華を誇ったことから、これは酒呑童子の前身と考えられますが、『続お伽草子』の「伊吹童子」には父親が「伊吹の弥三郎」だとあります。越後と近江の両地で弥三郎の名を冠する魔物の伝説があることは、決して偶然とは思えません。酒呑童子に関連して伝わった「伊吹の弥三郎」が、鍛冶の弥三郎と同名であったことから、弥三郎婆の伝説の誕生に一役買ったのではないのでしょうか。(文：江口知秀)



弥三郎婆の伝説が残る榊杉



酒呑童子誕生之地